Rede ― ≪有と時≫に於る言葉の問題

権八　哲明

言葉が殊更問題となってくる時代は不幸な時代だと言われている。たしかにそうかもしれない。生存の所在が円かな了解のまま即言葉に直結していく時代には言葉へのたじろぎも疑惑もおこらないであろう。そして生存の足元が赤裸のままに露呈し，答うべき言葉に出会いあえぬ時代に，言葉は生存に落差したまま不協和音をあげながら，殊更面前に浮かびあがってくると言い得るであろう。しかしだからといって途方にくれてばかりいられまい。むしろそれだけ言葉が人間の存在にとって決定的な関りを持っていること，だから単なる伝達表現のための道具手段なぞではなく根底から人間の有り方生き方を規定する事柄であること，ハイデッカーの言葉を借れば<人間の本性は言葉に基ずいている>US 241という事態であることをその根底にまで迫まって把持するに若くはない。

もっとも，思考は言葉なしに存在しえず，言葉を介してのみ成立し得る以上，思考が根本的であろうとすれば自ずから自己反省として言葉を省察せざるを得ないであろう。アリストテレス，ロック，ルソー，ヘルダー，カッシーラ，メルロポンティ etc.と，言葉を主題として考察した先哲にも事欠くことはないが，こうした重大な意義を孕んだ言葉に関して，言葉の真の意味で Radikal な省察をなしているハイデッカーに，小論は教えを請おうと思う。（なおこの小論は『言葉の本性ーハイデッカーに於る言葉の問題』と題された拙論の第三章に該当する。従って言葉が中心的問題となるハイデッカーの言葉をめぐる省察の本論たる中・後期の思惟にはふれられていない。引用記号は以下のとうりである。

無記号	Sein und Zeit
WM	Was ist Metaphysik?
WW	Vom Wesen der Wahrheit.
WG	Vom Wesen des Grundes
UH	Über den Humanismus (Bern版)
HW	Holzwege
EH	E. zu Hölderlins Dichtung
NI	Nietzsche I
Heb	Hebel-der Hausfreund
US	Unterwegszur Sprache

引用符号のついていない文未の数字は参照箇所を示す）

(一)

▲はじめに

『有と時』に於ては，<言葉の実存論的一有論的基礎は話 Redeである>SZ １６０として，実存力テゴリーたるRedeが分析の中心となる。この観点からすれば言葉とは<Redeが外に語りだされた有り方Die Herausgesch prochenheit> １６１であり，これは『有と時』以降で言われる言葉とは意味合いを異にしている。ここではむしろRedeを<言葉の本性>という了解の下にRedeに関するハイデッカーの所見を中心にしてとらえてみたい。

▲現有，世界一内一有

『有と時』は<有の意味への問い>を具体的に仕上げることを主導目標とするが，その問いとの連関の下で，人間は<有了解>をその本性とする有るものとして<現有>Dasein と名づけられ，このDasein の根本体制は世界一内一有In-der-Welt-Seinとして規定された。現有は世界の内に有る。それは直前に事物的に有る「世界」という客観の内に「心」「意識」という内的主観があって関連し合っているという事，即ち<或る一つの直前に有る主観と或る一つの直前に有る客観との中間に直前的に有る交渉の関係>１３２ということではない。<主観と客観は現有と世界というようなことと決して合致しない>６０ばかりか，この世界の一内に一有るという現象を爆破してしまう。１３２現有はデカルト的コギト，即ち<自己点>１４６の如きカプセルの如き<内面圏域>６２としてまずあり，その後に外的「世界」へでていくというのではないのである。現有はその原初的な有り方に於ては既に<外へ出ている>，即ち世界へと<超えでているübersteigen>WG４３。現有はまず初めに既に世界へと超えでて世界の下に身を挺してそこに脱自的に住まっているのである。

▲世界，指示性

現有は世界の内に有る。ここで言われる世界とは<世界の内部に有るもの>の総和でも実存性を欠いた<自然物の有>たる自然のことでもない。総じて，現前するものの全体（KOσμOS）というギリシヤ的な世界でも，キリスト教的神学的に表象された被造物（mundus）でも，通俗的近代科学的に表象された宇宙（Universum）でもない。US ２４世界とはその内に事実的な現有が現有として生きている一種の場であり，６２　この世界は<手前に有るものを内世界的に出会われる有るものとして開け渡し，のみならず更に他の人々をも彼等の共現有に於て開け渡す>１２３そういう開けの場なのである。現有はこの世界を予め開示し，開示されたこの世界が内世界的に有る諸事物，他者を出会わせる場処と成るのである。75/6

この世界の構造，世界性が指示性（Bedeutsamkeit＝根源的な意義性）である。<究極的な何のため><するーため><そのため><帰趨の何のもとに><帰趨の何に関して>という世界を構成している諸連関は指示するbedeutenという仕方で現有の了解的指示により先行的に関連づけられているが，この<関連全体>が<指示性>といわれる。即ち，己が有において己が有を関心の的とする現有は<己がために実存する>WG37 が，この<己がためUmwillen

seiner＞を根拠にして＜究極的な何のためWorumwillen＞が成立し，この＜究極的な何のため＞は第一次的な何のためとして，内世界的に出会われるものが＜何の許で＞＜何のために＞＜何によって＞用いられるのかといった有るものの有の性格たる＜帰趨Bewandtnis（事情性）＞を成立せしめ，道具として＜〜のため＞というUmzu 連関を形成する内世界的に出会われるものが＜手許に有るもの＞として道具的なものとして現有に出会われてくる。世界は指示連関として先行的に世界を開示する現有に親しまれ基づけられている一種の場なのであり，単に＜理論的認識＞が以上の言わば生きられた世界との接触を知らず忘れ去った後で表象する事物的な世界光景ではないのである。

▲開示性，Da

以上の世界一内一有としての現有には，そういう己れの有を己れの有において開示されている明らめられているといった事態が本質的に属している。＜現有とは己れの開示性である＞$_{133}$ 現有は他の何に拠ってでもなくまさしく己れの＜内なる自然の光lumen naturale＞$_{133}$ に拠って己れの有を＜照明されている＞。つまり現有は＜己れ自身に於て世界の一内に一有ることとして明け開かれている＞$_{133}$ のである。人間存在たる現有は，木石や動物とは違い，己れの有の風光を閉ざされず己れの有において開かれてい，覆われていず（＝Da），己が有のみならず非現有的なものの有をも開き照らしているのである。＜この有るもの（Dasein）にとって固有なることは己れの有とともに有に拠ってこの有が己れ自身に開示されているということである＞$_{12}$ こうした開けOffenheit をハイデッカーは隠されていず発見されていることとして真性あるいはDa とも言うが$_{220}$ このDa を構成しているものが了解，情態性，話である。この三つは実際には相即不離の関与の内に一体となって生起し，等根源的にDa を構成していることをさしあたって強調しておかねばならない。

（二）

▲ロゴス，Rede

ハイデッカーは$\lambda\acute{o}\gamma o\varsigma$，$\lambda\varepsilon\gamma\varepsilon\iota\nu$ という語を手がかりにRedeを以下の如く考えている。Da の諸構成要素を述べRedeを明確にする前に，Rede分析の導入としてその要点をみてみたい。

人間存在はギリシャ時代＜$\zeta\tilde{\omega}o\nu$ $\lambda\acute{o}\gamma\nu$ $\acute{\varepsilon}\chi o\nu$(言葉ヲ持ツ生キモノ）＞$_{25}$ としてとらえられたが，この$\lambda\varepsilon\gamma\varepsilon$iv（話スコト）とは＜語りかけたり論じあったりすることの内で出会われる有るものの有の諸構造を獲得するための手引Leitfadenである＞$_{25}$ あるいは＜有の解釈のための習歩紐Leitband＞$_{261}$ である。従って理性，判断，概念などという$\Lambda o\gamma os$ の多義性をうちはらいその＜根本意義＞においてみればRede（話）ということであり，しかもその話は有るものへと近づき有るものの有をとらえる手引，通路ということが言える。更に詳しく言えばRedeとしてのロゴスは$\delta\eta\lambda o\upsilon\nu$（顕ワニスル）$\alpha\pi o\phi\alpha\iota\nu\varepsilon\sigma\theta\alpha\iota$（見エシ

メル）ということ，即ち話の内で話題とねっている当の事柄を顕ワニシ見エシメ話者にも対話者にも近づき得るものとすることであり，従ってRede（λόγος）とは<挙示しつつ見えしめるという意味での顕わにすることder Offenbarmachen im Sinn des aufweisenden Sehenlassen>$_{32}$である。別言すれば<ロゴスには不覆蔵性，隠レナサトシテノ真性α－λήθεια が属している>$_{219}$ということであり<発見しつつ有る>という現有の有り方（＝真性）に於て発見されてあるものが<如何に有るかを言い現わす>$_{219}$という意味に於て，世界内部で出会われるものへ近づく通路であり<この有るものの有の規定のための手引>$_{154}$であるといえる。

このRedeを成立地盤として表立った「言語活動」は為されるわけであるが，Sprechen（話すこと）はRede（話）の<具体的遂行>$_{32}$として，単なる声をだしての発言にとどまらず<見エルモノヲトモナッタ音声ーその内でその都度或るものが看取されている音声>$_{33}$と規定される。

我々は以上によってハイデッカーの言葉の省察が，従来の言語観たる<内的心の動きの声に出しての表現，伝達>$_{US14}$の一つだという主張（これはこれで正しかろうが）とは根底的に相違し，人間の<一層高い資質>$_{48}$として有るものを開示し有を看て取るというところに言葉の本性を見だしている事を了解するとともに，後に<言葉は有の到来である>$_{UH70}$<有は言葉の内で現成する>$_{HW286}$<言葉は有るものの開けのただ中にいで立つ可能性を初めて与える>$_{EH351}$あるいは更に<その内に於て人間が大地の上に蒼穹の下に世界という家に住むところの境域を開け放っている>$_{Heb38}$とか，Sage（言）＝Zeigen（示）＝有るものを見えしめる現象せしめるとして言葉の本性をとらえてくる，先駆的萌芽が存することに留意せねばなるまい。

さてこうしたRede（λόγος）の性格をみてとるならば<内なる自然の光>として世界，自己を開示する現有の開示性＝Da を構成する三つの要素（Verfallenを入れて4つともされる）の一つとしてRedeがとり上げられているのが予め理解されてくる。次にその諸契機を考察することによってRedeを更に詳しく把握してみたい。

▲情態性（被投性）

人間の感情的な側面（情動，気分，感情）はアリストテレスの後，スコラ神学，近世哲学を通じその根本意義がとらえられぬまま，知性と意志の単なる随伴現象と見なされてきたが$_{130}$，ハイデッカーはこの感情的な側面を積極的に評価している。例えば<感情の状態性die Zuständlichkeit des Gefühls>$_{NI62/3}$という観点から次のように言われている。

<感情とは我々が有るものとの，従ってまた同時に自分自身との関係のなかで自分を発見する様相であり，我々が自分ではない有るものと自分自身との両方へむけて自分が気分づけられているのを見出す様態である>。要するに<我々がその時折に物事や自分自身や仲間の人間達に同時に接している状態><現有がその内で脈打っている状態>が，感情に於て開示されてくるのであ

る。感情の状態性は言わば人間存在の原初的風光であり<根源的なものであり>$_{NI\ 63}$ 現有の有の開示においてその開示性，Da を構成する重要な契機である。こうした<感情の状態性>は『有と時』では<情態性Befindlichkeit>とされおよそ次の三つの性格を持つ。

(1) 情態性は現有の有，Da の被投性，事実性という性格を開示する。被投性あるいは事実性とは<いずこから>とも<いずこへ>ともわからぬままに暗がりに留まっている有，Da の内へ現有が投げこまれ，そうした暗がりの深淵たる有へと<引き渡されているÜberantwortung>という現有の有の性格である。このことは<彼自身に依って彼のDa の内へもたらされたのでは無い>$_{284}$ という現有の<負目>という性格，あるいはこの被投性を受けとめる時の本来的気分たる不安ということにつながる。

(2) 情態性は我々がその時折に物事や自分自身（実存）や他者に同時に等根源的に接して，それらを開示している状態である。つまりその都度の全体的な世界一内一有を開示することである。

(3) 情態性は<世界の原初的発見>$_{138}$ である。予めすでに開示された世界が，内世界的にある諸事象，他者を出会わせる場処を与えるのであるがこの世界の開けWeltoffenheitを共に構成するのが情態性である。情態性の開く世界があって内世界的なるものが我々に近づいて出会い来る。

以上の性格を持つ情態性は<心的状態を目前に見出すこと>$_{136}$ でもないし，内・外から生じるものでもない。<全ゆる認識意欲の働きに先立って>世界へと<無反省的に>$_{136}$ 引き渡し譲りわたして身を挺しているそのさ中に突如襲うüberfallen 世界・他者・自己の原初的発見である。

▲了解（企投）

情態性とともにDa の有を構成しているのが了解であり従って現有の有は情態的な了解，了解的な情態性として性格づけられる。$_{335}$

了解は<認識作用から生じて来た知識というものではなく>$_{124}$ そうした知識，認識作用を初めて可能にする根源的な現有の有り方である。先に世界の世界性としての指示性，それを基づける究極的な何のためについてふれたが，指示性や究極的な何のためが開示されるのも現有が己れの有に於て己れの有を了解するというこの了解の有り方をする故である。了解は世界を構成する諸連関を<先行的な開示性に於て>$_{364}$ 予め開示された有り方において保持していて，諸連関の連関全体たる世界性を開示しているのである。

さてこの了解とは詳しくはいかなる事態か。有的にも何かを了解しているとは，<何かを為すことができる>という事と相即不離である。目の前のものが<ペン>だと了解していることは同時にそれで字を書くことができるということを意味するし「了解した」との答えは「やります」の意味を指す。同様に存在論的に言っても，了解とは可能で有ることを意味する。現有は可能存在である。それは現有が何か直前に事物的に有ってその上になお何事かを為し得るという事，有った後に何かを可能性として持っているという事ではない。まず第一次的に現有は有り得ること

Sein-können であり，己が有の可能性として常にその有の可能性を企投しつつ有る。しかも予め狙いを定め計画することなく一定の可能性へ投げ込まれていて，その被投的可能性を企投するのである。こうした被投的な己が有の可能性に向って企投しつつ有る事，<現有の有は究極的な何のために向って，また同様に等根源的に彼のその都度の世界の世界性たる指示性に向って企投する>$_{145}$ という事，そして現有がいかなる事態にあるかを何らかの仕方で承知しているという仕方で開示している事$_{336}$，これが了解という事である。総括していえば，被投的可能性たる現有はこの諸可能性へと非意図的に企投しつつその企投している可能性の方から己れを了解しつつ常に可能性として有り続けるという事が了解（企投，実存性）である。

▲解釈

了解を形成し上げるのが解釈でありその派生態が陳述である。解釈に於て了解はその了解内容を了解しつつ我がものとする。それは了解内容を認取するKentnisnahmeという事でなく了解に於て企投された可能性を仕上げるという事である。<世界の了解に於て開示されている指示性に基づき出会われる諸事物に関して如何なる帰趨が成り立ち得るかを現有は自己に了解せしめている>$_{148}$ が，こうした手許に有るものは解釈によって，<或るものとしての或るものetwas als etwas >という形で表面化する。<としてAls >が解釈によって表明的になる。

以上了解と解釈という事から次の事が帰結する。①何の了解も解釈（として）も付着していない<赤裸の直前に有るもの>$_{150}$ が経験されてしかる後にそれらの事物に「意義」や「価値」が投げかけられ「扉」として「人間」として受け取られるのではないということ。現有がDa し，世界の内に有るやいなや，一切の事象は何らかのものとして前反省的前主題的に了解されている。この<として>が解釈によって初めて表明的になるだけである。我々の「原初的世界」は単なる「感覚」と「行動」の世界ではなく，既に何らかの意味を荷負って出会われている世界である。②従って解釈は<解釈されるべきものを既に了解している>$_{152}$ のである。つまり解釈は了解に於る<先一構造Vor-Struktur> ー先持（解釈されるものを解釈に先立って持っている事），先見（先持の内にあるものを一定の解釈可能性に照準を合わせている事），先把握（解釈が何らかの概念に従って把持されるという意味で一定の概念性に向って己れ自身を決定している事）ーの内に動いている。解釈は無前提ではなく，ましてや内的主観の構成したものではなく，その都度了解されている<解釈学的状況>$_{232}$ の内で動き，それらによって養われている。

▲意味

被投的了解に於て開示され解釈によって表明的になってくるものが何であるのかを，Redeについて述べる前に触れておかねばならない。実存論的解釈学的<として>と了解の先構造として見えるようになるもの，これが意味Sinnである。従って了解に於て分節可能なるものとして予め描かれているものであり，そこに或るものの了解可能性Verständlichkeitが保持され

ているところのものであり，了解しつつ開示することに於て分節され得るものの事である。別言すれば，先構造を持つ了解が企投している処であり，そこから或るものが或るものとして了解可能になる処である。以上から意味とは現有の実存カテゴリーとして，世界の内に有ることに於て胚胎し，そこに生起しているものであって，事柄に附着していたり，事柄の背後に存したり，「心」の内にあったり，物と心の中間に宙に浮いて漂うものではないという事が強調されねばならない。そして更に言い進めるならば，意味とは有るものの有と密接する。了解的企投に於て開示されているものは，有るものがどのように有るのかという<有るものの有り方>[151] 可能性のことであり，意味をとらえるとは<了解可能性の内に入り来っている限りでの有それ自身を問う事>[152] だからである。<厳密に解されるならば了解されているのでは意味ではなくて有るものであり乃至有である。>[151] かくして被投的企投がそこへ向ってなされ，分節されうるものとして，その内に了解可能性を保持している意味とは，有の隠れなさとしての真性，有のDaであるといえる。意味を内的主観の構築物と捉える近代的思弁を，その根底へと打ち破り，我々の生きられた真の地平，現有の有，世界と人間との始源的接触のさ中に生起するものとして捉えることによって，ハイデッカーは，意味を初めてその来源した故郷に帰したと言える。

(三)

▲Rede

以上から情態的了解，被投的企投が，己れの有の事実性と可能性のただ中に立ち出で，世界・Daを開示し，世界の内に有ることの開示性の全内実を明らめ，そうして明け開かれたものを情態的に了解しつつ受け取める事であることをのべた。言わば前反省的「非理論的態度」[159] たる被投的企投は，何の「知」も了解もない人間の単なる「実践的態度」などではなく，既に全ゆる認識の土壌として，そこから解釈も陳述もその内実を汲み取ってくる基底である。そしてさらに了解された事柄（＝意味）が，Als 構造に於て表明的に固定されてくる解釈にもふれたが，こうして了解内容が分節されてくるところにRedeが問題となってくる。情態的了解内容の分節化としてRedeはDa，開示性を情態性，了解とともに等根源的に構成する。

<世界一内一有の情態的了解可能性は話として自らを語り出す。>[161] 了解，情態性の内に胚胎する了解可能性，分節され得るものとしてこの了解可能性を保持する意　，こうしたものがRedeに於て初めて了解内容として，分節された意義として表明的に確保されてくる。Redeという現有の開示性がなければ，Daに訪なう言わば原初的な人間存在の風光といったものは茫漠ととして自覚化されずに遠景を掠めていくだけであろう。<了解，情態性，頽落によって構成されるDaの開示性の全相はRedeによってその分節を受取する>[349] ことによって明確に保持されてき，現有は己が有の開示性に近ずく事も，それを看取る事もできるようになる。そしてこのRedeを基にして表立った言語活動たる解釈陳述も可能になってくる。Redeは言わば一切の言語活動の原典資料であり，生きたロゴスの成立基盤であり，この地盤を忘れた解釈や陳述は，その生きた意味，「生まの現実」を保持し得ず思弁に脱してしまう。Redeは<現有の有体制に属

し現有の開示性を共に構成するもの>$_{169}$ として世界の内に有ることという原初的に<生きられた事実性>の土台の上にしっかりと支えられていて，世界の内に有ることの全相を，分節する事によって確保し見守っているといえよう。<話は，世界の一内に一有ることの情態的了解可能性を意義に従って分節することである。>$_{162}$

このRedeは，その構造からみれば，話されている当の事柄を保持している故，<話されるもの>，話された内容としての<話されたこと>，話された事柄を他者とともに（mit）表明的に分つ（teilen）こととしての<伝達Mitteilung>，情態的に有る現有の自己表出としての<表明>，の4つの構成契機から成り立っている。

<表明>Bekundungあるいは<証し>Bezeugungに関しては後に次のように述べられているので，その要点を記し，Rede論の理解のよすがとしたい。人間とは<自らの何者たるかを証しせねばならぬ者である>$_{EH34}$ が，そうした自己の有の証言は<人間の有の附加的副次的な表現ではなく，人間の有の附加的副次的な表現ではなく，人間の現を共に構成している>$_{EH34}$ ものとして，口に出しての言語という派生的副次的言語の来源たる原初的な言語（＝話）である。自己の有の開示性を証言する事と，現有で有ることとは現有においては一つの事である。現有は己れが有るという事に拠って，その有に於て<異さらな意志>$_{US11}$ の介在もなく，既に何がしかを語り出しているのであり，この原初的な語り出しを原典にして，それに聞き入り，それを追語するnach-sagen事によって，初めて表立った言語活動も可能になる。この意で，Redeとは，眠ったり食べたりするという人間の諸能力活動と並存する一能力ではない。<人が有る>とは同時にその有を語り出し証言しているという事である。目醒めていても夢の中でも本を読んでいても仕事をしていても人の話しを聞いていても，人はたえず異さらな意志の介在もなく，その被投的投企という有り方において自己の有を語り出しているのである。$_{US11}$話なしには，人の有の開示という人の本性も生起しない，この意味で<人の有は言葉に基ずいている>$_{EH36}$ のである。以上の如き事態を指してハイデッカーは<現有が言葉を持つ>$_{165}$ と定義するのである。

▲Rede の様態

Redeとは，語や語句の結合としての普通考えられる表立った言語表現の成立基盤であり，世界の内に有ることの全相，情態的了解可能性，意味を分節し紡ぎ出すことであり，従ってRedeには<声に出して発言することは本質的なことではなく>$_{211}$，むしろ沈黙や聴取，更には<良心の声>における<喚ぶこと>を，ハイデッカーはRedeの本質的可能性，様態であるとしている。このことは後に<恐らく言葉は性急に語り出すことよりもむしろ真の沈黙を要求する>$_{UH92}$ <語り得る事と聴き得る事とは等根源的である>$_{EH36}$ あるいは，<呼ぶ事>によって有るものの現前をもたらし，方域世界を開示するというように$_{US}$，言葉に本質的な事として，沈黙，聴従，呼ぶ事を考えていくことに連なっていく。

沈黙は唖，無口になることではない。沈黙はRedeの様態として何ものかについての了解可能

性を分節している。冗長で止め度ない陳腐な日常的な空話が，Da，世界一内一有を閉鎖し，公共性に基ずく地盤のない平均的解釈をしか露呈しえない事に比して，真に了解可能性に向い合い，その豊かな内実を保持し<豊かな開示性を駆使している>といえる。むしろ沈黙を背景にしてこそ言葉は真性たり得るのである。<沈黙は言葉なくしても存在し得る。しかし沈黙なくして言葉を聞く事ができる。正しい言葉とは沈黙の反響に他ならない。>（M. picard：Die Welt des Schweigens，S. 23）従ってまた沈黙に於てのみ他者の言う事も聞き得，他者と<共に相互に有ることも>透徹した仕方で可能となる。沈黙とは同時に聴くことであろう。

聴くことは，語られている音響としての音声を聴く事を本質的な事としないし，語っている他者の「内部主観」に聴き入るということでもない。<他人の話をじっと聴く事に於ても吾々が差当って失ず理解するのは，言われた事である……吾々は初めから既に他人と共に，それについて話がなされているところの有るもののもとに有るのである>$_{164}$。総じて聴いているのは，他者の話に於て言われた事柄そのものであり，自己の有に於ては<関心>から来る<友人の声>であり，つまり有がDaとして開かれたその開示，被投的企投に於て情態的に了解された意味，それを聴いているといえよう。

さて<喚ぶことRufen>というRedeの今一つの様態に関しては<良心の声><友の声>として次のように語られている。良心は喚び声Ruf として，<無なることの根拠で有ること>$_{283}$＝<負い目>という現有の有の姿を喚び覚まし，<ひと>に喚びかけて己れの最も自己的に有り得ること＝<先駆的決意性>へと黙しつつ静寂の内に喚び起すのであるが，この喚び声は<私の内から私を超えてくる>$_{275}$ ところの<それEs>の喚びかけであるとされる。このEsは結局現有の有の根底たるSorgeであるが，後に，現有のDaに有からの関与が存すると積極的に言われてくるのに呼応して，Esも単に現有の有たるSorgeにとどまらず，有そのものであり，言葉とは<有の音なき声の語りかけ>$_{WM49}$ を聴従しつつ言葉にもたらしてくることだと言われてくる一つの萌芽的な記述があることを，ここでは留意しておくべきであろう。

▲言葉，陳述

<Redeが外に語り出された有り方が言葉（語の全体）である。>$_{161}$ RedeはDa の全相被投的企投の情態的了解可能性，意 ，有のDa を分節することとして，言葉の原初的な基底をなしている。といってもRedeが言葉と全く別に成立するというのでもない。内語にしろ書くことにしろ，演説にしろ，報告にしろ，読むことにしろ，黙して聴くことにしろ，普通に言われている言葉，言語活動が為される時同時に，その根底に遍く存している言葉の成立地盤といえる。言葉はその根本から考えれば，Da，情態的了解可能性を分節するという有り方（＝Rede）をしていると言ってもよい。ちなみに，意義とは了解可能性を保持する意 という分節可能なるものがRedeに於て分節されたものの事であり，Redeが外に語り出されることに応じて言葉（語）に現われてくる。このRedeという有り方をふまえてみれば，<諸々の単語という物Worterdingeがあってそれに諸々の意義が賦与されてくる>$_{161}$ ということではなく，むしろ諸意

義へと語が生い立つて帰属してくるといわねばならない。また，Redeに於ては発音することは本質的なことではないが，<諸々の語に於て声に出して発言すること>$_{32}$としての<語ること>は，Redeの<具体的遂行>$_{32}$とされる。

さて以上の表立った普通に考えられる言語表現は，詩とか感嘆語とかは別にすれば，日常的にしろ理論的学術的にしろ大抵，陳述（判断）という形で遂行されている。陳述という事を今少し立ち入って考えながら更にRedeの何たるかをはっきりさせたい。

解釈したり判断したり陳述したりする事の根底にRedeが存し，陳述が被投的企投に基ずき解釈の派生態である事，それ故に陳述の述べる事，意味は，既に被投的投企に於て胚胎している意あるいは<先ー構造><としてー構造>に由来し，それらを変様しつつも保持している事は，上述した事柄から明らかであろう。この陳述はRedeの構造に呼応しつつ<伝達しつつ規定しながらの明示>$_{156}$と規定される。例えば「このハンマーは重い」と陳述するとしよう。この陳述に於ては，「重いハンマー」という有るものが明示されているのであり，単なる表象や心的状態が示されているのではない。またそうして明示されたハンマーは<重い>と規定され，外に語りだされてくることに於て，共に「見える」という仕方で他者とともに分たれる，つまり伝達されている。つまり陳述とは，まず主語となる無規定の事物に出会い，それからその基体的事物の諸相を規定し述語づけ，そこでとらえられた内容を他者の主観に伝えるといった事ではなく，<重すぎるハンマー>としてのハンマーが一挙に出会われ，それが陳述の単なる形式たる主語ー述語の図式に分離されて<このハンマーは重い>という形をとったのにすぎない。陳述，総じて一切の言葉は，言わば言葉以前の人間と世界との原初的交わりたる世界ー内ー有，Da に基ずいてそこから来源する。<解釈と了解から陳述は出ていて>$_{160}$ <その「起源」を見廻し的解釈の内に持っている。>$_{158}$ 「ハンマーは重い」という発言は，ハンマーを持ちそれを使って釘を打ち込むという行為の場にその土台を持っているのであり，この行為の次元に於て萌芽しRedeを介して分節されてくる意味，了解内容が，陳述によって表立って表明され伝達されてくるのである。<陳述はそれ自身で，有るもの一般を第一次的に開示し得る如き宙に浮いた態度では決してなく世界ー内ー有という基盤の上に常に既にそれ自身を保持している>$_{156}$ こうした陳述の性格を考えるなら，真理（＝真性）の所在が陳述にあるのではなく，<陳述の「所在」が真性にある>$_{226}$ のだというハイデッカーの真理観も容易に理解されてくる。

ハイデッカーの言う真理とは，有るものが発見されて，隠されていないということを意味し，それはDa 地平，開示性，自由＝<有るものの露現性の内に晒すこと>$_{WW16}$という現有の体制に基ずいているのであり，この地平で発見され顕わになったもの（＝真で有るもの）が，陳述の内に保持され伝えられ語られてくるにすぎないのである。真理とは，まさに我々の世界とのその都度の曇りなく開かれた始源的接触の内にあるのであり，だからこの地平をはなれ，事象をアプリオリな「内的主観」の内に基ずかせ，それを言葉にもたらして，その陳述を，「普遍的客観的妥当性」を有する「真理命題」とのべたてても「生ける真理」は失われてしまっているのである。<真理は命題を故郷とせず>$_{WW13}$である。

これまでの言語学は，以上のような来源と根底を持つものとして陳述，言語表現を捉えずに，文法，品詞，音韻などといった＜言葉の前景＞$_{EH36}$ あるいは「死んだ形式」の内で言葉をとりあつかい，こねまわし，ずたずたに切り刻むだけであり，人間存在の原初的次元で生起している生きられた言葉そのものを忘却していたと言うことができる。伝統的＜形而上学がヨーロッパの「論理学」と「文法」という型態のなかで既に古くから言葉の解釈を支配してきた＞$_{UH54}$ のである。それは単に言葉についての学問的成果が不十分であったということにとどまらない。人間の本性たる，有了解，有の開示を覆い隠して，人間の存在の根拠をゆるがせにしていることを意味しているのである。

▲移行

被投的投企に於て開示される情態的了解可能性，更に言えば有の開示，有のDa を受け取め分節し確保する手引がRedeであり，言葉はこうしたRedeを基としていることが解明された。そこには，『有と時』以降の言葉をめぐる省察の種々の萌芽が有るとしても，今だ言葉が現有という世界の内に有るものからのみ焦点を当てられていることが留意されねばならない。『有と時』に於ては＜空話＞という＜現有の日常性を有論的に一層根源的にまなざしにもたらそうとする＞$_{166}$ ことがねらいであり，この限定の内で言葉の問題がふれられているにすぎないのである。＜現有の有の体制の内における言葉という現象の占めるべき有論的「所在」＞$_{166}$ を，現有の有り方たる＜Redeを手引＞として明らかにしているだけである。だから＜言葉の実存論的ー有論的基礎＞としてRedeが分析され，＜現有的に有るもの＞としての言葉の側面が問題とされたとはいえ，＜言葉としての言葉の有＞$_{US}$ は，今だ主題的に探求されてはいない。それ故ハイデッカーは今後の言葉をめぐる究明の課題という事にふれ，疑問符を伴いながら次のように述べているのである。＜畢意，哲学的探求は次の如き事を問う事をいつかは決意せざるを得ない……一体如何なる有り方が言葉には総じて帰属するのか……言葉は，内世界的に手託に有る道具の一つで有るのか，それとも言葉は現有という有り方をもつのか，或いはまた両者のいずれでもないのか…言葉の有は一体如何なる有り方をしているのか＞$_{166}$ ＜言葉の有は暗がりに留まっている…言葉の有への研究的な問のための地平すら包み隠されている。＞$_{166}$

従って，Redeを中心になされた『有と時』での言葉のとりあげ方は，＜言葉の有＞を主題的にとりあげる後の言葉のとりあげ方とは，始めから違ったものなのであり，何もハイデッカーの言語観が変更されたということではない。むしろ，『有と時』に於て予料された言葉そのものへの問いが，後に主題化されてくるということにすぎまい。$_{UH59}$ ハイデッカーの他の思惟にもいえることであるが，言わゆるKehreということも，以前の立場を否定し＜他の立場＞へと変更して移ると言った「転向」的な意味あいは全くないのであり，$_{UH72}$ 有への問いの進展とともに＜思惟の道の一つの滞留地＞$_{US98}$ がただ後に残されただけなのである。＜哲学そのものの本性はいつも哲学自身に対して向き直るkehren。そして根源的な哲学ほどますます純粋にこの自己転回において躍動し，そしてこの円環の旋回もほとんど無の辺縁に接するほど遙か遠く

に抽し出されている＞NI24

〔哲学（西　　哲　史）修士課程一回生〕